

## <特集コラム5>

# 4年間の学びを振り返る

—教職実践演習「マイ・ベスト・レポート交流会」の取り組み—

小笠原 拓

(鳥取大学地域学部)

### 1 はじめに

2015年4月に教職実践演習が開始されて5年が経つが、開始当初、授業を構想するにあたって、学生たちのモチベーションをどう維持するのが大きな課題であると考えていた。特に私が担当を予定していた中学校高等学校の文系(国語・英語・社会の免許取得者)の場合、所属も異なり、教員を進路としないものが多数を占めることも予想され、授業の意義を実感させることがかなり難しいのではないかと予想していた。

そこで考えたのが、「マイ・ベスト・レポート交流会」という取り組みである。ポートフォリオに残されているレポートの中から、テーマに合ったレポートを持参させ、その内容をめぐって交流を行わせることにした。他の活動との兼ね合いもあるが、15回の授業のうち5回から6回程度をこの取り組みに当てている。学生の様子は概ねポジティブなものであり、これまで少なくとも、モチベーションが維持されず授業が成立しないということはなかった。ここでその内容の一端を紹介してみたい。

### 2 マイ・ベスト・レポート交流会の進め方

「マイ・ベスト・レポート交流会」の進め方は至って単純である。まず事前に教員が次回の授業のテーマを指定し、受講者はその内容にあったポートフォリオ内のレポート等を持参する。当日は、ランダムな3~5名程度のグループを作り、各々のレポートを用いて、テーマに沿って意見交流を行う。最初の15分は各自のレポートの内容を紹介し、メンバーはその内容をメモして後に意見交流を行うときの材料として用いる。次の45分で意見交流会を行い、テーマに沿ってお互いにどんなことを考えてきたか、意見を出し合う。その際、教員からも2~3個の質問を提供し、それについても流れの中で話し合ってもらうことにする。話し合いの際には司会者は設けないが、各回のファシリテーター(進行役)を1名設定する。ファシリテーターの役割は、できるだけ話し合いが盛り上がるように、複数の人に話を振ったり、盛り上がりそうな話題に転換したりするなど、全員が意見交流に「楽しく」参加できるよう気を配ることにある。あくまで盛り上げ役であって、話を整理する人ではない。むしろ無理に話を整理せず、より楽しく話すように仕向けることが重要である。最後の15分間で、各グループのファシリテーターが話し合いを総括して3分程度の報告を全員に向けて行う。なお学生たちには、最終課題として、授業での意見交流などを踏まえて「私たちは何を学んできたのか」と題するレポートを作成させることにしている。

### 3 話し合いを楽しむ学生たち

この交流会の進め方は、筆者がこれまで行ってきたブッククラブ（読書会）の考え方がもとになっている（筆者が行ったブッククラブの実践については、小笠原（2015）を参照）。ブッククラブ活動を授業に取り入れる際、最も参考にしてきた吉田（2013）によれば、話し方には「スピーチ型」と「探求型」の話し方があり、多くの学校教育では「スピーチ型」の話し方が行われているという。しかしそのような話し方では、物事を深く考えることはできず、話すことを通して新たな発見も生まれえない。必要なのはよりリラックスした形で、お互いを認め合い、相互に協力し合うような「探求型」の話し方であるとしている。筆者もこの考えを踏まえて、学生たちに話し合いを行わせている。具体的には、「正解を求めないこと」「みんなが話に参加できること」「お互いの話に積み重ねるように話すこと」「最後は話したことが楽しかったと感じられるようにすること」といったことを中心にアドバイスを行っている。また話し合いが少し停滞していると感じられるグループについては、適宜、間に入って話題提供をし、話すこと自体が楽しいと感じられるような雰囲気づくりを心掛けている。

あくまで主観的な印象ではあるが、3～5人程度の比較的親密度の高い関係の中で話すことを学生たちは非常に楽しんでいる。ちなみに出席者は25～30名程度であるが、グループはその都度ランダムに設定し、基本的に同じメンバーで話し合いを行うことはない。とはいえ取得免許や所属が異なる学生であっても、話ができないというようなことはほとんどなく、1回につき約1時間程度の意見交流会であっても、話すことがなくて時間を持て余すような様子もあまり見られない。むしろ感心するのは、同様の活動を行った別の学年と比較しても、4年生が高い「話す力」をもっており、状況に合わせて話し合いを「楽しむ」ことができている様子が見られることである。昨今、若者のコミュニケーション能力がしばしば問題にされるが、卒業研究やゼミ活動などを通じて、本学の大学生は高いコミュニケーション能力を身につけつつあるのだということを確認することができる。

#### 4 おわりに

ここからはあくまで仮説の域を出ないが、実のところ学生たちは、このような「探求的な」話し合いの場を求めているのではないだろうか。スマートフォンやSNS等の発達によって、身近な人々と直接話すことを嫌う若者が増えていると言われることも多いが、本当にそうなのか改めて考えてみる必要がある。学生たちの様子を見てみると、「教師の仕事とは」とか「教育と社会の関わり」とか「地域における学校の役割」といった複雑で抽象的な話題についても、意外に楽しそうに議論をしている。そういった話題を話してみたかっただけにもかかわらず、なかなか話す機会を得ることができなかつたので、折角の機会を逃すまいと話しているような印象すらある。

もちろん普通の学生を見る限り、政治や哲学といった固いテーマについて議論を戦わせるような雰囲気を感じることはほとんどない。こちらがそういった議論をゼミの中でもちかけても、自分はよく分からないという態度を見せて、議論を避けようとすることが多い。しかしひょっとすると、それは筆者の議論の進め方が間違っていただけであって、そういった事柄そのものから完全に目を背けているという訳ではないのかもしれない。学生たちの可能性を高めるために、私たちはどのような機会や場面を用意する必要があるのか、この取り組みを通じて、改めて考えさせられている。

(参考文献)

吉田新一郎 (2013) 『読書がさらに楽しくなるブッククラブ』新評論。

小笠原拓 (2015) 「ブッククラブ」形式で行う読書指導の可能性, 『地域教育学研究』7巻1号。

小笠原 拓 (鳥取大学地域学部教員)